

濟世記念碑 碑文

貧に處(しよ)して其心を變(か)へざるもの甚鮮し貧者多くて邦家の進軍を阻害せざるもの亦甚稀なり

一家の浮沈邦家の休戚は實(実)に繋がって防貧事業の成否に關す

馬屋上村に徳行の士あり藤井静一と稱す

夙(つと)に濟世の大志を抱き思ひを防貧事業に馳すること極めて厚く先ず其居住地安部倉住民の融和

緝睦(しゅうぼく)を圖(図)らむとして懺悔會を起し更に

融通講を組織して金融共濟を圖(図)り又更に矯風

會を起し知徳の啓發(発)風俗の改善公共心の向

上等嘉績俱(とも)に舉(挙)かる

大正元年九月に至り安部倉共同救護社を組織し各自其分度に随ひ家資金を累積運用して共濟の途に備へ又義金を蔵畜して道義の觀念を厚からしむ

大正六年五月岡山縣濟世顧問制度の設置せらるるや官先ず藤井氏を舉(挙)げて馬屋上村濟世顧問となす

盖該(当該)制度は世界に於ける防貧事業の權(権)輿なり

安部倉共同救護社は其制度の本旨に合致するを以て藤井氏は大正七年四月馬屋上村共同濟世社を起し村内を八區(区)に分ち各區(区)其支社を設け安部倉を濟ひたる方法を以て全村を救はむとす

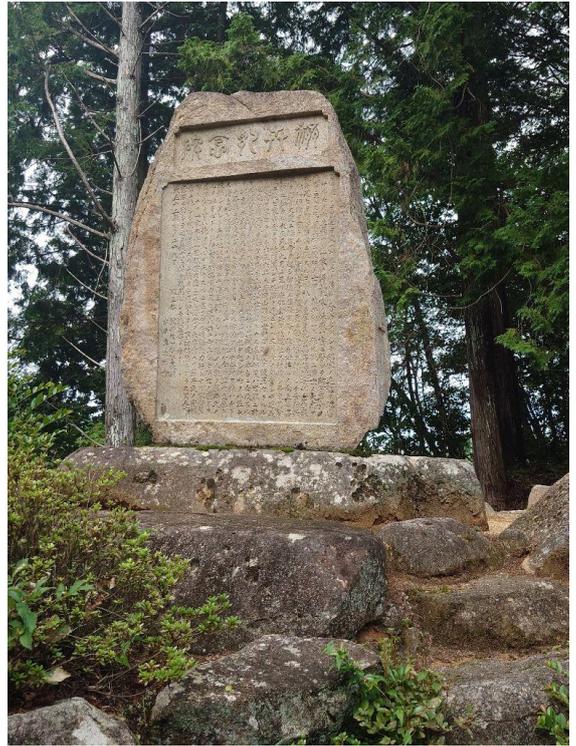
洵(まこと)に是れ防貧事業の徹底を期するものなり

救護社は今や濟世支社と改稱したれども結社以來實に二十週年回顧すれば部落の人能く藤井氏の心を以て心となし積苦累徳其資力及び道義共に向上して隔世の感あり

盖(当)防貧の事は先づ人心を正うするにあり然る後勤勉力行となり家資鞏固(きょうこ)となり一家平安の一國振興す

真に是濟世の大事業なり

藤井氏の安部倉に施し徑路(徑路)を察するに極めて適切今日の事功偶然にあらず里人感奮石に勒(ろく)して之を後世に傳(伝)ふ後昆(こうこん)心して此豐(豊)碑を看よ



大正十二年四月二十九日

從三位 笠井信一撰併篆額(てんがく)

大原專次郎書

現代語訳

貧しい中に身を置くと、改心して励もうという者はきわめて少なく、貧しい者が増えると、国家の発展を阻まないのもまたきわめて稀である。

一家の浮き沈み、国家の盛衰は繋がっており、防貧事業の成否に関わっている。

馬屋上村に藤井静一という徳行の士があった。

早くから世を救う大志を抱き、防貧事業に極めて厚い思いをもって実行に移し、まずその居住地である安部倉の住民の融和と和睦を図ろうと「懺悔会」を起した。

さらに「融通講」を組織して金融共済を図り、またさらに「矯風会」を起し、知徳の啓発、風俗の改善、公共心の向上等、その功績はいずれも素晴らしいものであった。

大正元年9月には、「安部倉共同救護社」を組織して、各自の分に応じて家資金を蓄え、運用して共済のための資金とし、また義捐金を蓄えて地域住民の道義の観念を厚くした。

大正6年5月、岡山県済世顧問制度が設置されるや、県はまず藤井氏を挙げて馬屋上村済世顧問とした。

当該制度は世界の防貧事業の起りである。

「安部倉共同救護社」は、済世顧問制度の本旨に合致し、そのことをもって、藤井氏は大正7年4月、「馬屋上村共同済世社」を起した。村内を8区に分けて各区にその支社を設け、安部倉を救済した方法でもって全村を救済しようとした。

これは、防貧事業の徹底を期するものである。

「救護社」は今や「済世支社」と改称したが、結社以来、実に20周年を振り返れば、部落の人、よく藤井氏の心・考えをよく理解して自分のものとし、努力を重ねて徳を積み、その資力と道義ともに向上して今や隔世の感がある。

防貧はまず人心を正しくするにあり、その後、勤勉で生業に励むようになり、家資強固となって一家平安となる。

その結果、国を繁栄させることに繋がる。

まさにこれ、済世、世を救う大事業である。

藤井氏が安部倉に施した防貧事業の筋道について考える時、極めて適切なもので、今日の素晴らしい成果は決して偶然のことではない。

里の人々は心に強く感じ入り、それを石に刻んで後世に伝える。

子孫たちよ、心してこの豊碑を見よ。

大正12年4月29日

題字 従三位(子爵) 笠井 信一

書 大原 専次郎

※「心をもって心となす」参考

老子:徳経:任徳第四十九

任徳第四十九

聖人無常心。以百姓心爲心。善者吾善之、不善者吾亦善之、徳善。信者吾信之、不信者吾亦信之、徳信。聖人在天下、**歎歎**爲天下渾其心。百姓皆注其耳目。聖人皆孩之。

聖人は常心なし。百姓の心をもって心となす。善なるものはわれこれを善とし、不善なるものもわれ

またこれを善として、善を徳。信なるものはわれこれを信とし、不信なるものもわれまたこれを信として、

信を徳。聖人の天下に在るや、**歎歎**として天下のためにその心を渾す。百姓はみなその耳目を注

ぐ。聖人はみなこれを孩にす。